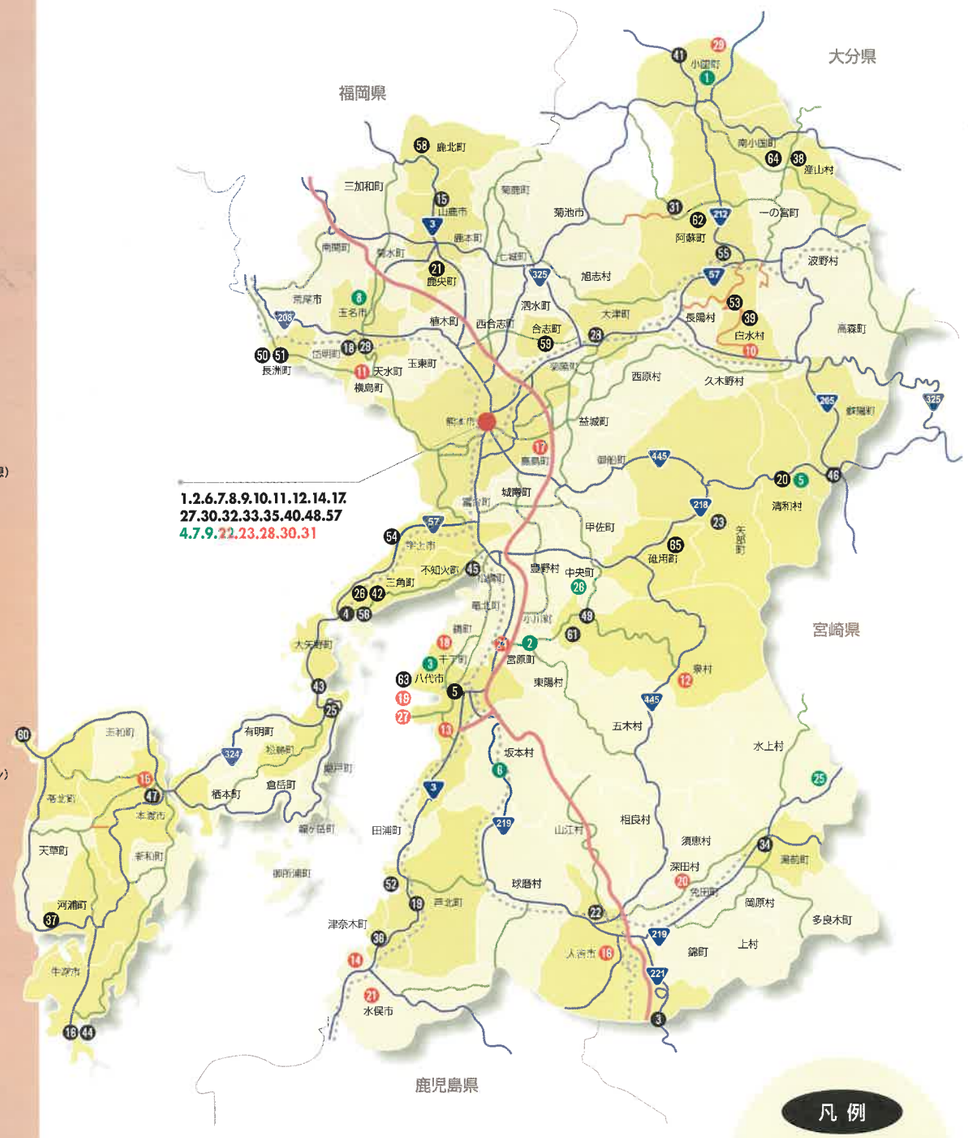
熊本県内各地に建設・計画されたくまもとアートポリスの建造物。現在65のプロジェクトが参加。各地のまちづくりの拠点になっています。

KUMAMOTO ARTPOLIS PROJECT MAP

くまもとアートポリス・プロジェクト・マップ

1. 熊本北警察署
2. 県営保田窪第一団地
3. 加久藤トンネル換気所
4. 三角港フェリーターミナル
5. 八代市立博物館・未来の森ミュージアム
6. 熊本市花畑パークトイレ
7. 熊本市上江津湖畔トイレ
8. 熊本市営新地団地A
9. 熊本市営新地団地B
10. 熊本市営新地団地C
11. 熊本市営新地団地D
12. 熊本市営新地団地E
13. 県道橋景観整備（基礎調査）
14. 熊本市営託麻団地
15. 光のまちづくり（まちづくり構想）
16. 牛深ハイヤ大橋
17. 県営帯山A団地（公開コンペ）
18. 玉名市文化施設構想
19. 湯の香橋
20. 清和文楽館
21. 県立装飾古墳館
22. 球磨工業高校伝統建築コース加工組立室棟
23. 鮎の瀬大橋
24. 公園ファニチャーデザイン、同整備マニュアル（構想）
25. 松島町合津終末処理場管理棟
26. 石打ダム管理所
27. 県営新渡廻団地
28. 大津町第二庁舎・町民交流施設（構想）
29. 玉名展望館
30. 大甲橋景観整備（構想）
31. 草地畜産研究所畜舎
32. 再春館レディースレジデンス
33. 県立美術館分館
34. 湯前まんが美術館・公民館
35. 県営竜蛇平団地
36. つなぎ物産ギャラリー
37. 教会の見えるチャペルの鐘展望公園
38. 花の温泉館
39. TOTO AQUAPIT ASO（阿蘇山上公共トイレ）
40. 白川橋景観整備
41. 杖立橋+Pホール
42. 石打ダム資料館
43. 天草ビジターセンター・天草展望休憩所
44. うしぶか海彩館
45. 不知火文化プラザ
46. 馬見原橋
47. 天草工業高校実習棟・体育館
48. 熊本北警察署坪井交番
49. ふれあいセンターいずみ
50. 有明フェリー長州港ターミナル
51. 荒尾警察署長州交番
52. 県立あしきた青少年の家
53. 草千里公衆トイレ
54. 宇土マリーナクラブハウス
55. 阿蘇・散墨園（公開コンペ）
56. 漁業取締事務所
57. 水前寺江津湖公園管理棟
58. 鹿北町アートプロジェクト
59. 県立農業大学校学生寮
60. 富岡園地公衆トイレ
61. 氷川ダム管理所（設計完了）
62. 一の宮警察署内牧交番
63. 八代市立高田あけぼの保育園（設計中）
64. 南小国町営杉田団地・矢津田団地（設計中）
65. 砥用町町民センター（設計中）



凡例
- 高速道路
- 国道
- 主要道
- 有料道路
- 鉄道

●発行ーくまもとアートポリス事務局（熊本県土木部建築課内）
〒862-8570 熊本市水前寺6-18-1 TEL 096-383-1111（内線6215／6230）FAX096-384-9820
●撮影ー牛深市役所秘書企画課、（株）城野印刷所、くまもとアートポリス事務局、中央印刷紙工（株）

アートポリス推進賞　●くまもとアートポリス推進賞　●くまもとアートポリス推進賞選賞

1995年度
1. 小国町立西里小学校
2. 東陽村石匠館
3. 八代広域行政事務組合消防本部庁舎
4. 株式会社野田市兵衛商店流通団地営業所
5. 清和物産館（四季のふるさと）
6. 荒瀬ダムボートハウス
7. 出田眼科病院
8. 尚玄山荘

1996年度
9. 慈愛園ノーマンホーム
10. 阿蘇白水温泉「瑠璃」
11. ふるさとセンターY・BOX

1997年度
12. 久連子古代の里
13. 養護老人ホーム八代市立保寿寮
14. 水俣市営洗切団地
15. 丸尾焼工房
16. 人吉の舎Ⅱ／平井邸
17. 浮島周辺水辺公園

1998年度
18. 老人保健施設かがみ苑
19. 熊本県信用保証協会八代支所
20. HOUSE:H-M
21. 水俣市保健センター・水俣市総合もやい直しセンター
22. 古閑邸
23. 聖母の丘
24. 宮原町下宮はまどん公園

1999年度
25. 水上村立湯山小学校
26. 中央町総合交流ターミナル「石段の郷 佐俣の湯」
27. 植柳新町公民館（地域学習センター）
28. シルワ・エッセ
29. 50M一棟の森美術館
30. 宮崎耳鼻科
31. 矢野邸

Kumamoto Artpolis News

23
くまもとアートポリスニュース第23号
2000年3月発行

◆巻頭インタビュー アートポリスを歩く 江崎康夫氏

特集●SPECIAL EDITION
くまもとアートポリスの新しい試み
「私たちのまちづくり」

●第5回くまもとアートポリス推進賞表彰式
　くまもとアートポリス記念講演会

●完成プロジェクト紹介

K·A·P

◆巻頭インタビュー

アートポリスを歩く

牛深市観光協会副会長　江崎康夫さん

訪れる人に安らぎを、地元に元気を。

●●●牛深ハイヤ大橋とうしぶか海彩館

●●●「健康」と「経済」2つの効果

「こういう橋はちょっとほかにない、市民の誇りです」。牛深市観光協会の副会長を務める江崎康夫氏の視線の先には、アートポリスプロジェクトの一つ「牛深ハイヤ大橋」がある。銀色にきらめき、牛深湾に優美な弧を描くこの橋は、県内一の水揚げを誇る牛深漁港をまたぎ、水産加工設備の整った後浜地区と従来の漁港施設のある台場地区を結ぶ連絡橋として、平成9年8月に完成した。「夜は夜でライトアップされて、またきれいなんですよ。カップルで歩いてほしいほど雰囲気があるんです。ここがデートコースになるといいですね」

「この橋はただ渡るだけの『橋』じゃないんですよ。この橋を渡ってぐるーりと歩くとちょうど35分。ウォーキングにちょうどいい距離なんです。地元の人の健康増進にも役立ってるといえるでしょうね。私の妻も暖かい季節にはよく歩いてますよ」。橋の全長は883m。なるほど、平日の昼間でも穏やかな日差しを浴びながら歩く人の姿が見える。

実は牛深市にはもうひとつ、アートポリスプロジェクトの建造物がある。牛深ハイヤ大橋の完成に先立つこと5カ月、平成9年3月に完成した「うしぶか海彩館」だ。こちらは、第3セクター・株式会社うしぶかによって運営される水産観光センターである。吹き抜けの建物の中央には回遊式水槽が設けられ、地元で水揚げされた魚介類が泳ぐ。この水槽の魚介類はもちろん、地元で水揚げされた新鮮な魚を食べることのできるレストランがあり、それを加工したてんぷら類や魚の干物を販売する物産館、「おさかな道場」「ハイヤ道場」といった体験コーナー、地元の作品などを展示するギャラリーも併設。文字通り、水産と観光の情報発信センターとなっている。うしぶか海彩館から車で10分ほどのところには同じ㈱うしぶかが経営する温泉館「やすらぎの湯」もあり、牛深観光に厚みが増した。

「市民の誇りや憩いの場というだけでなく、やはり観光にも大いに効果がありましたね。健康プラス経済効果というんでしょうか。海彩館とハイヤ大橋が完成してから、それまで年間30万人だった観光客が、50万人にも増えましたからね。おかげさまで海彩館は、十分採算ベースにのっています」。各地の第3セクターが苦戦している中、うしぶか海彩館の健闘ぶりは「快挙」とも言える。

●●●二つのコアでソフトが生かされる

「もちろん、こう言ってはなんですが、海彩館の成功はアートポリスプロジェクトという『建物』のおかげだけではないですよ。それはもう、スタッフのお力は大きいと思いますよ」。スタッフの心遣いは「やすらぎの湯」の名に象徴されている。少しでも訪れた人に「安らぎ」をというものだ。うしぶか海彩館の広い空間には、そこかしこに、味わいのある文字で書かれた案内板が見える。レストランに入ると「お食事はいかがでしたか?」というスタッフのメッセージがテーブルに置かれる。「観光で何より大切なのは『もてなし』だと私は思っています。今、観光はより遠くへ、より安く、そしてより豪華にという傾向になっています。観光地にとっては厳しい時代といえますが、この『もてなし』を何よりの観光資源にしていきたいですね」。逆にいえば、そんなソフトの力をおおいに発揮できるのがうしぶか海彩館と牛深ハイヤ大橋なのだ。

「海彩館とハイヤ大橋ができるまで、牛深の観光の目玉といえば、ハイヤ踊りと海中公園だけでしたからね」。海中公園には平成9年に新しく半潜水式のグラスボートが導入された。自然豊かな牛深の海を楽しむことのできる天草らしい観光スポットだ。「海彩館と海中公園と温泉。この3本柱で牛深を売っていきたいんです。海底遊歩道をつくろうといったアイデアも実はあるんですけどね。毎年4月のハイヤ祭りでは、ハイヤ大橋を踊りのコースの一部にしています。海彩館と橋という二つのコアができたおかげで、1泊2日のパックなど観光のイベント企画を立てやすくなりました。それに、やっぱり牛深へ来てもらったら、おいしい魚。地元で捕れた牛深ならではの。これですよ」。牛深生まれ牛深育ちの江崎氏の顔に笑みが広がる。「一度、福岡の親戚がこちらへ来た時、地元で捕れたキビナゴを料理して食べさせたら、えらい喜んでくれて…」。

牛深ならではの味と、牛深ならではの安らぎを提供したい。それが、活性化の大きな鍵になる。訪れた人には大いなる「いやし」を、そこに生きる人には「元気」を―。それらを育む場として、アートポリスプロジェクトがある。

ハイヤ祭りでは牛深ハイヤ大橋が踊りのコースの一部になっている

USHIBUKA

水槽の魚を館内のレストランで食べることもできる。回遊式水槽は水族館のよう

地元の学生たちの作品を展示した海彩館の展示室。地域と共に歩んでいる。

「地元でとれたおいしい魚で来る人に喜んでほしいですね」と話す江崎氏

青い空と紺碧の海をバックに銀色の牛深ハイヤ大橋が優美な弧を描く

「わあー大きい」。復元された全長12mのかつお船が海彩館の2階に展示されている

江崎 康夫
ezaki yasuo

PROFILE

牛深市観光協会副会長。
江崎汽船株式会社専務取締役。
昭和16年7月19日生まれ。妻と長男とともに牛深市在住。趣味は「趣味と実益を兼ねて」旅行。

コミュニケーションを密に図ることを最大の目標に。

●●●「私たちのまちづくり事業」いよいよスタート

◆建築家プロフィール

湯前町

宇野 求 UNO MOTOMU

●1954年　東京都生まれ
●1978年　東京大学工学部建築学科卒業
●1984年　同大学院博士課程修了、工学博士
●1985年　フェイズアソシエイツ設立
●1990年　東洋大学講師
●1992年　東京理科大学講師
●1994年　千葉大学助教授

主な作品◆豊橋東口駅前広場、幕張ベイタウン、四谷テンポラリーオフィス、MURAMATSU　HOUSE　ほか

受　賞◆1992年　吉岡賞
1996年　千葉県建築文化賞
1998年　日本建築美術工芸協会特別賞　ほか

小国町

末廣 香織 SUEHIRO KAORU

●1961年　大分県生まれ
●1984年　九州大学工学部建築学科卒業
●1986年　同大学大学院修士課程修了
●1986～1990年　SKM設計計画事務所
●1990～1991年　EAT一級建築士事務所代表
●1991～1994年　ベルラーヘ・インスティテュート建築大学院
●1993年　ヘルマン・ヘルツバルハー建築設計事務所
●1994～1998年　九州大学工学部建築学科助手
●1998年　NKSアーキテクツ共同主宰

主な作品◆佐伯の住宅、南風台の住宅、小林クリニック、三瀬の山荘、YKK黒部堀切寮　ほか

受　賞◆1998年　日本建築士会連合会設計競技銀賞
1999年　第14回豊の国木造建築賞優秀賞
1999年　第12回福岡県建築住宅文化賞優秀賞
ほか

南小国町

片山 和俊 KATAYAMA KAZUTOSHI

●1941年　東京都生まれ
●1966年　東京芸術大学美術学部建築科卒業
●1968年　同大学大学院修士課程修了
環境設計一茂木研究室勤務
●1973年　東京芸術大学美術学部建築科助手
●1981年　DIK設計室開設
●1989年　東京芸術大学助教授

主な作品◆草原の家、金山町営住宅羽場団地、彩の国ふれあいの森・森林科学館・宿泊棟、コーハウス喜多見　ほか

受　賞◆1995年　日本建築家協会新人賞
1996年　日本建築学会作品選奨
1998年　彩の国さいたま景観賞

南小国町

川崎設計
（代表取締役社長　前田欣宏）

主な作品◆済生会熊本病院、済生会川内病院、済生会唐津病院、NT信託ビル、熊本県立大学新学部棟、熊本市立城南中学校　ほか

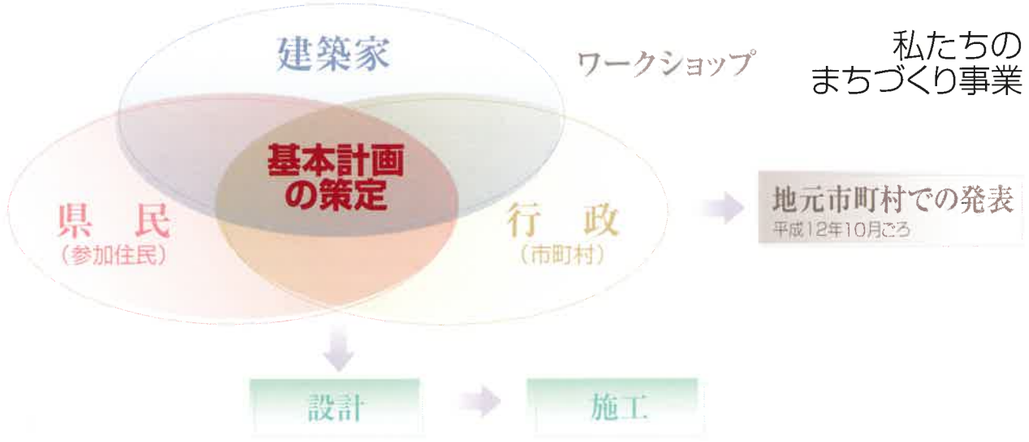
受　賞◆1999年　文部大臣奨励賞
1999年度第5回くまもとアートポリス推進賞
ほか

特集　くまもとアートポリスの新しい試み

アートポリスコミッショナー・高橋靖一氏の建築事務所に「私たちのまちづくり事業」に参加する建築家・関係者が集合した。この日が初めての顔合わせ。高橋コミッショナー、伊東バイスコミッショナーから今回の事業の目的が改めて伝えられた。「『対話』を大切にするというアートポリスの考えに基づき、ワークショップの手法を取り入れるのが今回の事業。町民とできるだけ密にコミュニケーションを図り、プロセスを大事にして地域に根づいた質の高い建造物を造ってほしい」。

この「私たちのまちづくり事業」とは県民や行政およびコミッショナー推薦の建築家が協働して、公共施設の整備基本計画を作成することで、優れた建造物を建設し、地域に開かれた施設づくりを進めようというもの。地域の歴史や風土、文化などについて再考し、ひとりひとりが地域をあらためて見つめ直すという意味でも「濃密な対話」が欠かせない。この事業は、ワークショップで、計画の段階から参加した誰もが自由に意見、知恵を出し合い、地域の施設やまちなみ整備を考えていこうという画期的な取り組みとなる（6町が参加）。

それぞれの町のワークショップメンバーは町ごとに異なるが、町民を中心に、婦人会や老人会など幅広い。ワークショップは10～20人程度で行われるところが多く、途中からの参加も歓迎できるよう考えられている。町によってはワークショップの運営に大学生や大学関係者も参加。今年8月中には基本計画が作成され、10月には各町で発表されることになっている。



砥用町

八束 はじめ YATSUKA HAJIME

●1948年　山形県生まれ
●1972年　東京大学工学部都市工学科卒業
●1978年　同大学大学院博士課程中退後、磯崎新アトリエ
●1984年　八束はじめ建築計画室設立
●1991年　ユービーエムと改称

主な作品◆アンジェロ・タルラッチ・ハウス西麻布、狛江の家、文教大学センターハウス（3号館）＋8号館　ほか

蘇陽町

岡河 貢 OKAGAWA MITSUGU

●1953年　広島県生まれ
●1979年　東京工業大学工学部建築学科卒業
●1981年　同大学大学院建築学修了
●1984年　パラディサスアーキテクツ共同主宰
●1986年　東京工業大学大学院博士課程修了
●1998年　広島大学工学部助教授

主な作品◆尾道の家、ドミノ1994、ドミノ1995武蔵野泉邸、向島洋ランセンター展示棟、ドミノ1996かわぐちかいじ仕事場住居　ほか

受　賞◆1988年　尾道市街づくりコンペ入賞
1991年　尾道市優良建築物入賞
1997年　播磨科学公園都市　近未来戸建住宅デザインコンペ入賞　ほか

苓北町

阿部 仁史 ABE HITOSHI

●1962年　宮城県生まれ
●1985年　東北大学工学部建築学科卒業
●1988～1992年　コープ・ヒンメルブラウ建築設計事務所ロサンゼルス支店勤務
●1989年　南カリフォルニア建築大学修士課程修了
●1992年　(有)阿部仁史アトリエ設立
●1993年　東北大学工学研究科建築学専攻博士課程後期修了博士号（工学）取得
●1998年　東北工業大学建築学科助教授

主な作品◆宮城県総合運動公園スタジアム、読売メディア・ミヤギ・ゲストハウス、松島公園管理事務所・艇庫、くりこま山車等展示施設、白萩町集会所　ほか

受　賞◆1992年　宮城県陸上競技場公開設計競技最優秀賞（共同設計）
1998年　吉岡賞「読売メディア・ミヤギ・ゲストハウス」　ほか

苓北町

小野田 泰明 ONODA YASUAKI

●1963年　石川県生まれ
●1986年　東北大学工学部建築学科卒業
●1995年　同大学建築学科講師
●1996年　同大学建築学科助教授

主な建築計画◆仙台メディアテークのコーディネート
仙台基督教教育児院の建築計画
仙台市茂庭台豊齢ホームの建築計画　ほか

受　賞◆1989年　全国公開設計競技「空気神社」コンペ優勝賞
1996年　日本建築学会奨励賞　ほか

私たちのまちづくり 1

計画対象

くまがわ鉄道の終点、湯前駅とその周辺整備

参加建築家/宇野求+フェイズ計画研究所

湯前町

DATA（平成12年2月末日現在）

●人口／5,249人
●面積／48.41km²
●基幹産業／農林業・製造業

昔は、九州山地を控え、球磨地方で一番賑わった町だった。駅前にはアートポリスプロジェクトの「湯前まんが美術館・公民館」があり温泉「湯楽里」とともに人気を呼んでいる。

高校生たちが10年、20年後、懐かしく誇らしく思える場所に。

「町の人たちの声を最優先したい」と吉村町長（左）。「おもしろいワークショップになると思いますよ」と宇野助教授

担当課から説明を受ける宇野助教授（右端）

商工会、社会教育関係者、主婦、行政といろいろな顔ぶれが揃ったワークショップ

「若い人にとって魅力ある町にしたい」。事業に期待する声が多く上がった

ワークショップが始まった。建築家、住民、行政の初顔合わせである。千葉大学の宇野求助教授は、「湯前町は人も景色も価値のあるものばかり。時間をかけて勉強しながら進めていきたい」と、まず町の印象を語った。

今回、整備の中心となる湯前駅はくまがわ鉄道の終点。一番多い利用者は、毎日通学している高校生たちだ。「高校生こそ、町の宝。彼らが誇りに思うような場所を作りたい」と宇野氏が言えば、「観光客がゆっくり過ごせるような場所に」「駅の利用者だけでなく、町民が寄り合えるような場所に」といろいろな意見が出てくる。

元々、ハード整備に“ワークショップ”という形で住民が参加してまちづくりをするというのは、湯前町にとっては初めての試みだ。「不安はあったが、住民と専門家が一緒になって構想から模型までを作るという、この事業に魅力を感じた」と吉村光町長。宇野氏からワークショップの手法について提案が出された。「町の外から見た、特に若い人の意見がほしい。そこで今回は地元、熊本大の協力を得て千葉大や熊本大の学生にも参加してもらいます。皆さんの意見をもとに模型を作り、それを何度も作り変えながら進めていきましょう」。「宇野先生の、若者が喜ぶ駅づくりに大賛成。子どもたちのために大いに意見を出したい」と主婦の黒崎さんが答えた。

同町は平成10年の駅前周辺検討委員会の答申を受け、現在、中心市街地活性化基本計画を策定中だ。湯前駅は、その対象地域である里宮通りと桜町通りの起点であり重要なポイントとなる。駅前開発についても、すでに町民50人が作業部会で何カ月も話し合ってきた。「駅周辺が変わることは、もしかしたら店の構えも変えようという話になるかもしれない。だからこのワークショップも真剣です」と商工会の瀬口理事。湯前町で商う人、暮らす人、やがて湯前町を故郷にする高校生。いろいろな人たちの夢や期待が、自らの手で形になる日が少しずつ見えてきた。

湯前駅周辺。湯前まんが美術館・公民館、商店、旅館、食事処、パチンコ店などがそろい、町民に馴染みの深い所である

「ここにはよく来られるんですか？」駅前バス停で町の人に声を掛ける宇野助教授

終着駅という特長も生かしたい湯前駅

私たちのまちづくり 2

計画対象

生涯学習を応援する小国町立北里小学校屋内運動場（体育館）建て替え

参加建築家/末廣香織+NKSアーキテクツ

宮崎町長も今回のワークショップが地域のネットワーク強化につながることを期待している

小国町

DATA（平成12年2月末日現在）

●人口／9,511人　●面積／137km²
●基幹産業／農林業

「悠木の里」をキャッチフレーズにする小国町は面積の80%を杉の人工林がおおう林業の町。また、町内6カ所から温泉がわいている。

小国の豊かな自然に包まれた小国町立北里小学校。付近には生涯学習の拠点ともいうべき木魂館がある

地域のネットワークのなかで考える、生涯学習の拠点づくり。

「小国町の方たちは積極的ですからね。どしどし本音を言われる。それを専門家としてどうやって整理していくかが課題ですね。夢だけを膨らませて話し合いしっぱなしで終わるんじゃなく、どう夢をかたちにしていくのかを考えないとワークショップは意味がないですから」。阿蘇郡小国町の「まちづくり」のテーマは町立北里小学校の体育館建て替え。ここを担当する建築家・末廣香織氏はゼロからの計画というめったにないチャンスに意欲的だ。

「単なる小学校の体育館をつくるんだったら、保護者でもない僕たちがわざわざ集まって話し合う必要はないわけですよね」「そりゃ、やっぱり地域開放型にしてもらわんと。照明も要るし、広くて使いやすいものにしてほしい」「地区の人たちは待ってるんですよね、広くて使いやすい体育館ができるのを。今、わざわざ別の地区まで出かけて行ってママさんバレーをやってるぐらいだから」。小学校が建つ北里地区には生涯学習の拠点施設・木魂館などもあり、新しい体育館の利用について、地区の人たちの関心は高い。ワークショップには、学校長や保護者代表だけでなく地区全体の人々が集まって、意見を述べ合う。

生涯学習の拠点を持つという「土地柄」もあってか宮崎暢俊町長は「単に体育館をどうするかだけでなく、他の生涯学習施設との連携を図ったり、また地域に根ざした教育をどうするかといった基本的なことを地域ぐるみで考えるきっかけになるといいですね」とワークショップを位置付ける。ワークショップによってより地区のネットワークが強まり、生涯学習が充実していくようだ。

「スポーツに限定しないでミニコンサートなど文化施設として使えたらいいと思う。木魂館に音楽サークルの合宿なんかで来る人の需要もあるし」「体育館の用途が広がったら、地元の人も満足するし、外から来る人も増えて…」「そりゃ、地域活性化になりますよ」。地区内外のニーズを見すえた「現実的な」夢が、地区の連携によって広がっていく。

老朽化が激しく建て替えが決まっている体育館。建て替え用地は検討中だ

ワークショップには、保護者だけでなく地区のさまざまな人が参加する

模型を展示しながらの計画案の説明が行われる

「地域の活性化と地域の人とのつながりの強化が必要ですよね」。住民たちの活発な意見交換が続く

私たちのまちづくり ③

計画対象

暮らしを彩る文化の拠点 町民センターの建設

参加建築家/八束はじめ

砥用町

DATA（平成12年2月末日現在）

●人口／8,178人
●面積／102.32km²
●基幹産業／農林業

町中央部を一級河川の緑川が東から西に流れ、国の重要文化財である「霊台橋」をはじめ、多くの石橋があることで知られる。

ワークショップには学校関係者をはじめ、さまざまな立場の人が参加している

北川浩一郎町長（右）と対談する八束氏（左）。八束氏は「まず、ホールでどんなイベントをするのか？　町の皆さんがどんなことに使いたいのか?というイメージをよくつかんでから設計しようと思います」と、抱負を話していた

熊本大学の桂英昭講師も応援。学生と共に集めた他町村の施設のデータをスライドにして持参、町民に説明した

「環境問題にも目を向け、できるだけムダなエネルギーを使わず、設備投資もしなくてすむようにしたい」と八束氏

「図書館を2階にしました」。新しい設計案を説明する八束氏

人が集まり、心が和む、暮らしと文化の拠点づくり。

「この間取りなら、研修室で夜なべ談義ができますね」「パソコン室を図書室の中にしては?」「文化財を保管するスペースは?」「ホールの段差は何cm?」…。砥用町で開かれたワークショップでは、新たな計画案に対しての意見や質問が飛び交っていた。

同町では以前から「音響効果が整ったホールや図書館が欲しい」という声があり、ホールを備えた町民センターの建設を計画。用地を確保して、私たちのまちづくり事業に参加した。計画は、東京の建築家、八束はじめ氏が担当。八束氏は現地を視察後、「自然の景観を壊さず、威圧感のない建物に」と大まかな方針を示した。しかし、当初のワークショップでは、もっぱら町民の意見に耳を傾けることに徹した。

「建築家は設計した作品にわが子のような愛着がある。後になって変更を求められるよりも、事前にいろんな要望を聞いた方がいいんです」という八束氏。北川浩一郎町長との対談では、「町の文化振興を図るためにもホールが必要です。高齢化が進んでいるので、お年寄りにも使いやすい、傾斜の少ない建物にしてください」という町長に「高齢化社会を考えて設計したホールは、日本ではまだ少なく、とてもいい考え方です」と共感していた。

砥用活性化研究会の鳴瀬信一会長は、「砥用の木をたくさん使い、心が和む空間をつくって欲しい」と、ワークショップでは、いつも意欲的に発言。「町を活性化させるためにも、町民が集まりやすいセンターにしたい。自分たちでつくるものだから、町民自身が運営にも積極的に関わっていかなければ…」とも。また、社会教育委員の護城證子氏は、「みんなの町民センターだから、みんなが納得できるものに」と、ここでの話し合いを評価。ワークショップを通して、「町民センターを核にしてまちづくりを進めよう」という共通理解が深まり、まちづくりは一歩一歩前進している。

私たちのまちづくり ④

計画対象

住む人の意見を反映させた南小国町営杉田団地・矢津田団地建設

参加建築家/片山和俊+川崎設計事務所+DIK設計室

南小国町

DATA（平成12年2月末日現在）

●人口／4,971人
●面積／115.86km²
●基幹産業／農林業

東西に広がった形をしており、町の東側に全国的に有名な黒川温泉を有する。キャンプ場、オートキャンプ場も多い。

河津修司町長

片山和俊助教授

川崎設計事務所
（前田代表取締役社長）

長所と短所を分けながら貼っていく。どんな意見が多く、どんな点をみんなが大切に考えているかが、一目瞭然

市原団地を全員で見学。団地住民の協力を得て、中まで見せてもらえた

市原団地の長所と短所の紙を、みんなで再確認。大学生がポイントをまとめて分かりやすく説明

最終的に完成した市原団地の長所と短所をまとめた紙

自分たちの町を、自分たちでつくり上げるための第一歩に。

次々に人が、集まってくる。建築家、住民、行政、そして、ワークショップを手伝う大学生たち。町営杉田団地・矢津田団地建設のためのワークショップが始まった。今回建て替えが行われるのは、昭和38年から44年に建設された杉田団地。加えて、国道と川を挟んだ矢津田地区も住戸数増加への対応や、建て替えをスムーズに進めるために計画敷地となる。

今回計画を担当する東京芸術大学の片山和俊助教授が住まいの設計と考え方についてスライドで説明。絵を多用し、言葉だけではわかりにくい専門的な点も、住民にわかりやすいよう工夫されていた。

そして、全員で平成10年度に完成した市原団地を見学した後、南小国町自然休暇村管理センターに戻ってワークショップがスタート。全員がわいわいと市原団地の長所と短所を小さな紙に書き出し、集まった意見を、住民と大学生で分類しながら、大きな紙に貼ってまとめていく。「収納スペースが広い」「日当たりがいい」「庭があってよい」などの長所や「台所が狭い」「階段が昇りにくい」「色が悪い」といった短所がポンポンと上げられ、新しい団地が目指すものを和気あいあいの雰囲気の中で探していった。

「地形や気候だけでなく、人々の暮らし方などもよく知ることが大切。だから、たくさんの地元の人と話をして、本当に必要なものを見つけたい」と片山氏。建築家、住民、行政といった立場に左右されず、各人が団地を考えることが計画を成功させるポイントだと語った。

河津修司町長は、「現住民に納得して移り住んでほしいし、このワークショップ方式を、今後、他の団地を作るときの手本にしていきたい。また、地元の小国杉を利用することで林業振興になれば」と期待を寄せている。

この日住民参加者のなかでいちばん若かった上原健次さんは「若い家族が住む場合のことも考えて設計してほしいですね」と参加の感想を述べた。集合住宅だからこそ、一人でも多くの人の意見を反映したい。そんな思いに支えられて、ワークショップは今後も続いていく。

私たちのまちづくり 5

計画対象

21世紀を見すえた文化会館(仮称)の建設

参加建築家/阿部仁史+小野田泰明

芥北町

DATA（平成12年2月末日現在）

●人口／9,345人
●面積／66.99km²
●基幹産業／農業

町の西側は東シナ海に面し、風光明媚な海岸線が続く。天草島原の乱の激戦地・富岡城跡や内田皿山焼など歴史と伝統を今に伝える名所も多くある。

町の未来のために、何を造るか…。ワークショップで、計画の基礎から話し合う。

役場の若い職員も参加して行われたワークショップ

今回のプロジェクトを「これからのまちづくりを考えるきっかけに」と話す田嶋町長（写真右から2人目）

「ワークショップの中で、町のニーズとポテンシャルを発掘していく行程が重要です」（阿部氏・写真左）「東北大学や九州各地の建築科の学生を連れてきて、町の人たちと交流する中で、いろんなデザインを形づくりたい」（小野田氏・写真右）

ワークショップに子ども達も参加してほしいと、阿部・小野田両氏は、富岡小学校を視察

富岡町内にある病院。院内には、立派な私設図書館やギャラリーが設置されている

町の真ん中に、役場跡地がある。あの場所に、何か町のために役立つ施設をつくりたい…。一つの案として出ているのが、生涯学習のための文化的活動ができる町民文化会館。そこは、皆が自由に利用でき、世代間交流の場ともなる。

参加建築家は、東北工業大学の阿部仁史助教授と東北大学の小野田泰明助教授。阿部・小野田両氏は「ワークショップでは、まず町全体を皆で見直し、何が必要かを考えていきます。つまり、町の再発見になるわけですから、そこで出た意見や疑問は、21世紀のまちづくりにとても重要になってくるでしょう。僕たちは、計画者と建築家という違った職能の共同チーム。そういう意味でも、これまで大きなギャップのあったワークショップの成果と実際の建築デザインを確実につないでいく方法論で取り組んでいきたい。」と語る。

町では、今まで役場の若手が集まって、まちづくり計画を出したことがあったが、ワークショップという形で、子どもからお年寄りまで意見を出し合うのは初めて。田嶋章二町長は、「町民の意見を大事に進めていきたい。施設をつくるだけではなく、これからのまちづくりを考え、町全体を活性化させるいい機会にしたいですね」と語る。

初のワークショップには、今後町民が参加するワークショップをリードする役目として、また、若い世代の町民の意見を聞くため、若手の役場職員が参加。町の"ツボ（見所）"を付箋に書いて地図に貼ったり、町の企画案をグループごとにつくり、その後、発表が行われた。

町の核となる場所に、未来のために何をつくるのか…。基礎をしっかり固めながらのまちづくりに向けての一歩が踏み出された。

私たちのまちづくり 6

計画対象

宿場町に新しい何かを―馬見原地区まちなみ整備

参加建築家/岡河貢+パラディサス

蘇陽町

DATA（平成12年2月末日現在）

●人口／5,018人
●面積／118.92km²
●基幹産業／農業

ブルーベリーをテーマに町おこしを実施。産品開発も手掛ける。竹細工、木工作りの体験や宿泊ができる施設「そよ風パーク」でも知られている。

アートポリス参加プロジェクトの馬見原橋。上は車道、下は歩行者専用だ

馬見原の中心部。ワークショップでは、人々がこの町を愛し、誇りに思っていることがひしひしと伝わってくる

「いい町で育った人間は町への恩を忘れない」と故郷である尾道でのまちづくり体験を語る、建築家の岡河貢氏

「何人かのグループになって意見を出し合った、第1回目のワークショップが楽しかったので、今日も参加しました」という人も

「馬見原橋を中心に活性化を」と話す後藤町長

今のまちなみを壊すのではなく、その上に何かを積み重ねることで新たな町の物語を。

明治末期まで宿場町として栄えていた蘇陽町馬見原地区。当時関所だった通りは、現在、町の中央に位置する400mほどの商店街になっているが、人通りは少ない。ワークショップの開催で、馬見原の全家庭に声がかけられ、いろんな世代が集まった。

広島大学の岡河貢助教授は、フランスや尾道のまちづくりも手がける建築家。「人間の体はツボを押すとツボの周りが暖かくなり、全身が元気になりますよね。町も同じ。全体を見るより町のツボを探すことが大切です。ツボを刺激し、小さな地域が元気になることにより、町全体が元気になるのです。これからの町づくりには、視点の転換が必要なんです」。それに対して、若者から「自分たちはこれからの町を担う世代ですが、どうすれば町が元気になるのか分かりません。馬見原の町のどこがツボになりますか?」という質問が出た。これに答えた岡河氏は「私よりも、町に詳しい皆さんから、馬見原のツボとなるところを教えていただきたい」と会場からのさらなる意見を求めた。

後藤惠喜町長は、「馬見原橋をツボの一つとして考えている。平成7年6月にアートポリス参加プロジェクトとして建設した馬見原橋は、車道と歩道が別々になっており、渡るという機能の他に、人々が集うという機能も持っている。この橋の2つの機能を延長線にある商店街にまで生かせるような通りのあり方を考えることができないか」と話している。

岡河氏は、今まで 蓄積したものを取り払い、新しいものを作ってそこをツボにするのではなく、今までの歴史の上に何かを積み重ねていくことが大切になると言う。「例えば、昔風の白壁の建物に似せてまちなみをつくるというようなことではなく、町の記憶を新しく具現化するようなデザインにしたいですね」。

他にも町民から「家から眺める風景は本当に美しいんです。イベントでもいい、何かを行うことでもっと素晴しい町になってくると思う。でも、今さら町を白壁にするようなことでなく、他ではやっていない奇抜なことをした方がいい」という意見や「生まれ育った町の元気がなくなっていのくが辛かった。先生の話を聞いて希望が見えてきました」という意見が出た。町の人々に共通していることは、自分の町を愛し、誇りをもっているということだ。自らが作る"馬見原の新しい物語"が楽しみだ。

第5回

くまもとアートポリス推進賞表彰式・くまもとアートポリス記念講演会

事業主・設計者・施工者―多くの人の努力が「推進賞」に結晶する

去る2月10日、第5回「くまもとアートポリス推進賞」表彰式が行われ、同時にアートポリス参加プロジェクトである熊本県立農業大学校学生寮の設計者・藤森照信東京大学教授を講師に迎え、アートポリスを考える会との共催で記念講演が行われた。

表彰式に先だって、まず潮谷義子副知事（当時）が知事挨拶を代読。その後、水上村や中央町など、今回の受賞建造物の事業主・設計者・施工者へ表彰状が授与された。

引き続き、選考委員会委員長の堀内清治氏が講評を行い「現在の厳しい社会状況の中でも、28件の応募があったことを大変うれしく思う。今回受賞された7件の建造物は、いずれも事業主、設計者、施工者をはじめ多くの方々の努力の結晶と考えている」と述べた。「不況」といわれる中でも、質の高い建造物がつくられていることに、県民の環境デザイン意識の高さがうかがえる表彰式となった。

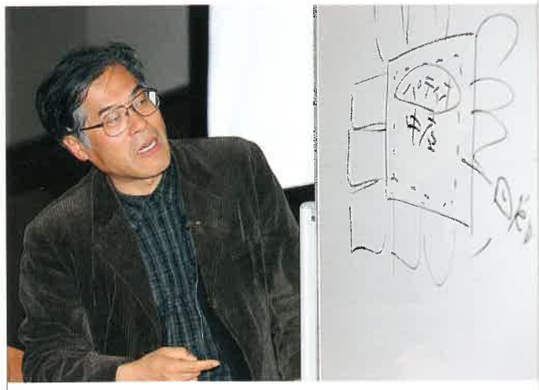
講評する堀内氏

記念講演

藤森 照信 東京大学教授

MEMORIAL LECTURE

時とともに味わいを深める自然の素材 そんな素材の力を現代建築に生かしたい



自然素材 は美しく風化する

熊本県立農業大学校の学生寮の設計をしました藤森です。私はできるだけ自然素材を自然に近い形で建築物にしていきたいと取り組んでいます。わりに明快に、好きな建物はこれだというのがあります。自分が好きなものを他の人が造っていないなら、自分でやる、ということです。

一般に知られていないけれど、自分がこういう建物を造れるものなら造ってみたい、というのがあります。その一つが、ポルトガル北部、スペインとの国境地帯の住宅です。そこは700～800mぐらいの山の真中に大きな石があるなと思ったら、それが住宅なんです。一見、大きな岩なんですが、私はこれをあの有名な建築家ル・コルビジェのお父さんの家じゃないかと思ったぐらいです。まるで孫悟空が出て来そうですよね。どうすれば現代の条件の中でこんな建物が造れるか、と考えてしまいます。

もう一つ、今度は日本の建物で大久保石材店というのがあります。これはおじいさんが一人でコツコツと大きな岩をくりぬいて造ったものです。これ、継ぎ目がないんです。ですから継ぎ目のない建物が持っている独特の力、素材の力が感じられますね。

自然の材というものは一つひとつ形も色もバラバラです。そのバラバラなところをどう生かせるかが、自然素材に取り組む時の課題だし、楽しさですね。バラバラさが、すごくいい味を出してくれるんです。それは新しい時だけじゃなくて、風化していくときも、味わいになっていく。風化していくプロセスも風化していった後も美しい。高度な先進的な技術で生み出された素材は出来上がった時は美しいんだけど、風化していくと美しくなくなる。自然の素材ほど、美しく風化できる。

私が造ったニラハウスの仕上げの木は無塗装です。板は100年ぐらい大丈夫なんですよ。時が経つと本物は金色になりますよね。これも美しく風化することの例です。それから博多の一本松ハウスは屋根を銅板で葺いています。銅板ならきれいに風化してくれる。私の自宅は屋根にタンポポを植えてまして、でもタンポポは綿毛になってしまうんですね。中学生になるうちの子どもが、友達から家はどこだと聞かれて、「タンポポの植えてある家」と言えずに「タンポポの植えてある家の近くだ」などと言ったようなんですが（笑い）。

「共同性」と「誇り」 が農大学生寮のテーマ

農大学生寮でも、もちろん自然素材を使いました。地場材の振興という地元からの要請もありましたし、私自身、自然の素材が農大にふさわしいと思いましたので。

学生寮を設計するに当たっていくつかのテーマがありました。

一つは共同性のある建築です。この学生寮が学生たちにとって最後の共同生活の場なんです。ここの学生たちはほとんど農業という自営の道を選ぶわけです。だから、強制された「共同」ではなく―今の学生は強制されると反発するだけです―素直に共同性を強められるような、若い人の感覚に合うものを目指しました。建築でどこまで社会的問題に影響を与えることが可能かは分かりませんが、私自身はまったく無力とも思っていません。

もう一つのテーマは、学生が農業に誇りを持てるような表現力のある建築です。今の農業の状況はよくないだけに、自然素材で皆がすごいと思うことをしたかった。建築は精神のありように少しは影響すると考えていますので。

最初の「共同性」のために、寮を中庭のある広場型の配置にしました。これは日本ではあまり見ませんが、戦乱が多かったり気候が厳しかったりするところでは普通のスタイルなんです。外に向かって閉じ、中に向かって開かれた形です。内部で親密性を増すようにしたものですね。また、二つ目の自然素材を誇れる建築空間にというテーマに対しては、柱にはクセのある赤松を、玄関のホールには自分で削った木を使い、水切り板は銅板、壁は貝灰とスサと海藻の汁をねったものを漆喰代わりに使っています。柱に銅板を巻くと腐食しないんですよ。木と接触している銅は非常に防腐能力が高い。徹底的に自然素材の持つ力を利用しています。

「自然の材」―これを利用して建物を造るというのは、農大学生寮のテーマでもあり、私自身のテーマでもあります。本物の持つ力が建築の大きな力となると信じています。本日はご清聴ありがとうございました。

「共同性」を育み「誇りと自信」を生み出す

熊本県立農業大学校学生寮

DATA

事業主	熊本県
設計者	藤森照信+入江雅昭+柴田真秀+西山英夫
施工者	
建築	冨坂建設・三和建設・生田工務店・七城建設・日動工務店
電気	日建電設・藤原電工・西日本電工・建栄テック
機械	西部管工土木・千代田工業・西山商会・蘇陽施設産業
所在地	菊池郡合志町栄3803
主要用途	学生寮
建築面積	4063.85m²
延べ面積	5297.87m²
階　数	2階
構　造	木造+鉄筋コンクリート造
施工期間	1999年7月―2000年3月

県産材を使い、外部にも内部にも木の質感が生かされた農業大学校学生寮。外壁に無塗装の木材をふんだんに使っているだけでなく、内壁の仕上げも床も天井も自然素材が使用されている。寮という性格上、快適性・機能性が重視されるのは当然だが、求められるのはそれだけではない。ここで生活する学生たちは、卒業後、ほとんどが自営の農家となる。寮は、学生たちにとって最後の共同生活となる場。食堂や廊下、中庭等さまざまなところに共同意識を育むような工夫がなされている。農業の道を選択した学生たちにエールを送るための、自然素材を活かした芸術性と精神性の高いこの学生寮によって、学生たちの誇りと自信が生み出されるにちがいない。

●建築家プロフィール

藤森 照信 FUJIMORI TERUNOBU

●1946年　長野県生まれ
●1971年　東北大学工学部建築学科卒業
●1978年　東京大学大学院工学系研究科建築学専門　課程修了
●1996年　東京大学教授
作品◆神長官守矢資料館、たんぽぽハウス、ニラハウス、秋野不矩美術館、一本松ハウス　ほか
受賞◆1998年　日本建築学会賞「建築論文/日本の都市・建築史の研究」ほか
著書◆建築探偵の冒険　ほか

入江 雅昭 IRIE YOSHIAKI

●1957年　熊本県生まれ
●1980年　熊本大学工学部環境建設工学科卒業
●1980年～91年　大栄設計
●1991年　IGA建築計画開設
作品◆古閑邸、坂口邸、加賀山邸、富田邸、福永邸ほか
受賞◆1998年度第4回くまもとアートポリス推進賞選賞

柴田 真秀 SHIBATA MASAHIDE

●1958年　熊本県生まれ
●1982年　法政大学工学部建築学科卒業
●1982年～84年　高山建築学校
●1984年～87年　宮坂建築事務所
●1987年～92年　アーバンランドスケープ
●1992年　UL設計室開設
作品◆百道の住宅、三角クリニック、青海苑デイケアセンター　ほか

西山 英夫 NISHIYAMA HIDEO

●1959年　熊本県生まれ
●1982年　熊本工業大学建築学科卒業
神戸大学工学部環境計画学科重村研究室研修生修了
●1983年～90年　Team Zooいるか設計集団
●1991年　西山英夫建築環境研究所開設
作品◆COUNTRYSCAPE、TOWN SCAPE水上村山の幸館　ほか
受賞◆1998年　日本建築家協会熊本住宅賞最優秀賞

開放的な空間が住民の「安心」をつくる

一の宮警察署内牧交番

DATA

事業主	熊本県警察本部
設計者	中尾　寛+岩佐設計
施工者	渡辺建設
所在地	阿蘇郡阿蘇町内牧1071-10
主要用途	交番
建築面積	154.35m²
延べ面積	111.00m²
階　数	1階
構　造	壁式鉄筋コンクリート
施工期間	1999年10月―2000年3月

国道212号に面したこの交番は観光地「世界の阿蘇」内牧温泉の入り口にある。周囲と調和するよう、建物は淡いクリーム色の煉瓦造りで、景観を壊さない配慮がなされている。内壁は外壁と同じ煉瓦タイルで仕上げられている。また、2ヶ所の光庭を設け、その床と壁材は内部と同じ煉瓦を使用。このように素材を統一することで、室内外の空間に一体感が生まれ、それが事務室、相談室といった室内の開放感につながっている。交番は観光地の玄関であると同時に、地域の人にとってはやはり安心のよりどころだ。地元で区長を務める森山幸義さんは「この地区には222世帯あるんですが、そのうち70歳以上のお年寄りが141人もいるんですよ。ですから、住民の安全や安心感確保といった交番の役割は大きいんです。新しい交番は広くて明るく、相談室もあるそうで、地域の人が気軽に相談に来られる場になると思いますよ」。新しい「地元の顔」へ住民の期待も高まっている。

採光のために設けられた光庭。「室内も明るくなり、いいアイデアですね」と区長の森山さん。

●建築家プロフィール

中尾 寛 NAKAO HIROSHI

●1961年　兵庫県生まれ
●1985年　京都工芸繊維大学住環境学科卒業
●1989年　筑波大学大学院芸術研究科総合造形専攻修士課程中途退学
●1989年～　設計活動
主な作品◆「週末住宅」「住宅／スタジオ」
受賞◆1992年　くまもとアートポリス'92デザインコンペティション第1部門
1992年　第9回吉岡賞

岩佐設計
代表取締役:岩佐敏巌
作品◆「阿蘇健康山荘」
「湯前町立里団地」
「進栄塗料社屋」
「熊本工業高校セミナーハウス」